✧✧✧✧✧✧✧✧✧✧✧✧✧✧✧✧✧✧✧✧✧

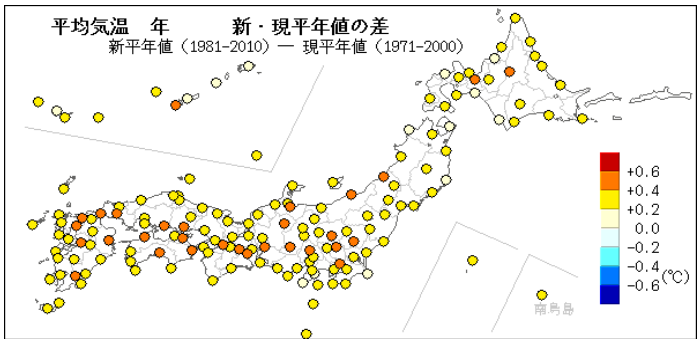
✧　新平年値の利用開始は 5 月 18 日です

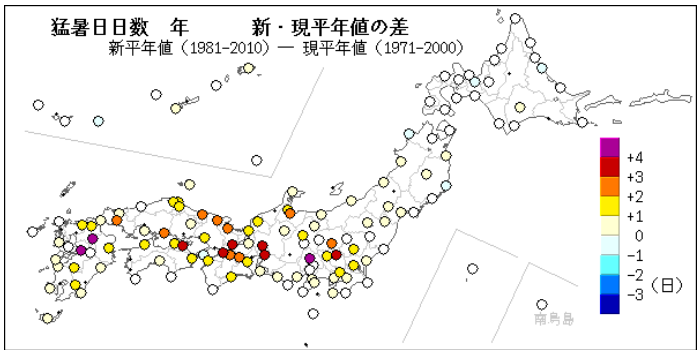
世界各地の気象や天候を評価する基準として、また各地の気候を表す値として平年値が用いられています。気象庁では、西暦年の 1 の位が 1 の年から続く 30 年間の平均値を平年値として利用しています。現在は 1971 年～2000 年の 30 年間の観測値を基としていますが、気象庁は 1981 年～2010 年の観測値を基に新たな平年値を作成しました。

気象庁は本年 5 月 18 日から、この平年値の利用を開始する予定です。これに伴い、季節予報や天候の解説等で用いている各種平年値が新しくなります。

算出される平年値は地上気象観測やアメダス観測だけでなく、高層気象観測、生物季節観測、梅雨入りや梅雨明け、台風の統計など、多岐にわたります。

今回の平年値は、気象官署の値で見ると、現在の平年値よりも全国的に 0.2～0.4℃程度高くなります。この原因として、温室効果ガスの増加による地球温暖化のほか、数十年周期の自然変動が考えられ、地点によっては都市化の影響も加わっていると考えられます。また、冬の気温が上昇することに関連し、日本海側の多くの地点で降雪量が 10%以上減少します。桜の開花も 1 ～3 日早くなります。35℃以上の猛暑日日数は東京では年間 1.3 日増えて 3.2 日ですが、京都は 3 日も増えて 15.4 日もあります。台風の発生数や接近・上陸数に大きな変化はありません。





新平年値は CD-ROM に納めて提供しており、気象業務支援センターで販売しています。